九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鎌倉街道・再発見

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 准教授

https://hdl.handle.net/2324/1517814

出版情報：歴史と地理 : 日本史の研究. 469, pp.1-26, 1994-09-20. 山川出版社
バージョン：
権利関係：(C)山川出版社

鎌倉街道・再発見

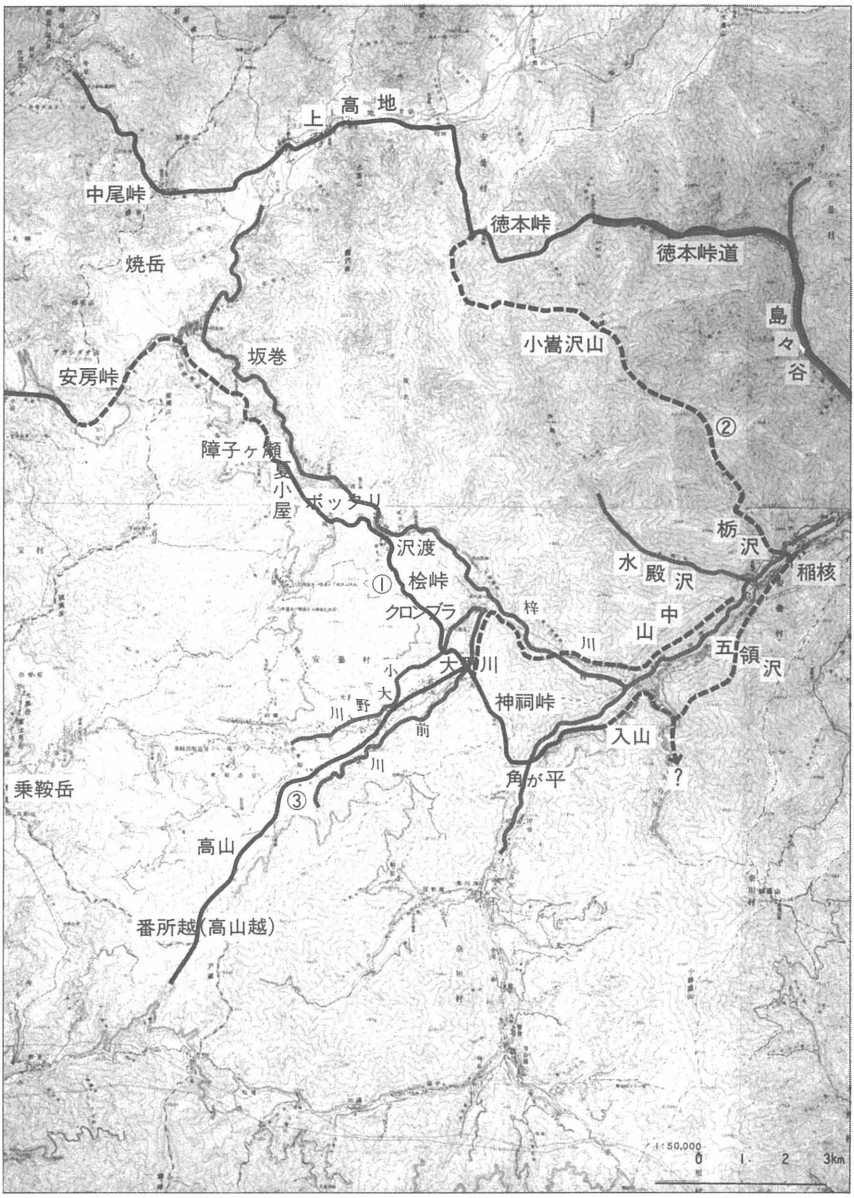
服部英雄

I　伝承の鎌倉街道

一　乗鞍山麓の鎌倉街道

鎌倉街道との出会い――回想の乗鞍　私が最初に鎌倉街道に関心をもったのは、学生時代に北アルプス乗鞍岳山麓でくらしていた頃だった。その頃、乗鞍にある大学の学生寮に関わっていたため、地元の大野川の小・中学生に接触する機会があったが、おりしも宮本常一『私の日本地図・上高地周辺』を読んで、その地の鎌倉街道の存在を知った。そしてその道筋が、急峻な梓川沿いにではなく、小さな峠と峠をつなぎつつ、梓川に併行していく道であることも知った。河川を制禦する技術がなかった中世という時代に、災害にも強く、最も安定した道が鎌倉街道だったのである。

そこで、子どもたちとともにこの古道を調べてみようと思った。小大野川にかかる吊橋を経て桧峠（くろんぶら）へ、前川にかかる吊橋を経て神祠峠へと、鎌倉街道に沿った村々を訪ね歩いたこともあった。安曇ダムの完成とともに桧峠も神祠峠も道路を断たれて廃村となったが、当時はまだ大野川に移り住んだ人たちが出作に行っていたのであろう。くろんぶらの頑丈な造りの家々のまわりには、まだ耕作されていた畑がかなりあったように思う。夏の青空にひまわりが印象的だった。一緒に行った子どもたちの中にくろんぶら出身の少女もいて、みなが「すずこねえちゃんの家だ」とい



地図１　乗鞍岳山麓の３つの鎌倉街道　①大野川、角が平、入山で伝承する鎌倉街道。②稲核で伝承する鎌倉街道。③野麦、阿多野で伝承する鎌倉街道。（破線は推定）

うので、「すずこの家か」と聞いたら、はずかしそうにうなずいていた。

二十年たってもう一度一人でくろんぶらを訪ねてみた。吊橋は朽ちていた。昔三人で吊橋を渡ったことがある。そのうちの一人が翌春雪の剣岳で遭難した。亡き友のことなど思い出しつつ、山道を行った。そろそろくろんぶらに着いても良い頃と思いながらも、なぜか暗い森ばかりがつづいた。しかしたちどまって目をこらしてみたら、木立のむこうに家の残骸とおぼしき柱がたっていた。ここがあのくろんぶらかと思いいたるのに、しばらくの時間が必要だった。

過ぎ去った歳月は、明るい村を太古の森に帰すまでに十分な時間帯だったのである。

伝承の鎌倉街道　古老たちの話にも鎌倉街道は登場する。その径路は北陸より安房峠に到り、それより下って、障子がわ瀬→夏小屋→ぼったり→いでの尻（池の尻）→ネギの沢渡→牛道→桧峠→くろんぶら→じょうあん坂（十半坂）→花戸→中平→大野川→峠沢→神祠峠→角が平→入山、そして以後は大白川を通り、現、朝日村の御馬越に出て塩尻、さらに甲府より鎌倉に到ったとする。別に五領沢（鵬雲崎の一つ西の沢）より稲核・橋場を経て松本に出たとする説もある。後者は近世の「松本さま」への道でもある。

ウェストンの道　日本の近代登山の父と呼ばれたウェストンが明治二十五年（一八九二）、安房峠や上高地からの帰路に用いた道も、大野川まではこの鎌倉街道であった。その道筋は「ザ・ジャパニーズアルプス」の付図にも示されている。

ウェストンは桧峠の茶店での出来事を記しているが、往来は賑やかなものだったのだろう。もっともこの茶店は白骨温泉への通行客をもあてこんだものかもしれないが、神祠峠の場合、一帯の村々が全て夏期の出作りで、冬期には、みな本村大野川に帰っていたのに較べ、唯一神祠峠七戸のみが冬期も定住する村であったということは、流通線上にある優位さを物語るとも考えられる（但し廃村前の神祠峠には店はなく、生活物資は下った大野川に求めていたというが、これは明治以降の交通形態の変化によろう。ウェストンも大野川より明治二十一年開鑿の梓川沿いの新道を通っている）。

のうとぶり　安曇の人たちは正月を越すのに鰤を食した。鰤は飛騨高山から野麦峠を越えてきた。だから飛騨鰤と呼ばれた。信州人には鰤が飛騨でとれると思っていた人が多いそうである。

しかし飛騨の中継地高山を経由しない大野川では、それを「のうとぶり」といった。能登鰤である。一本三貫目もする能登鰤は歩荷や牛荷によって、鎌倉街道を運ばれてきた。(1)

秀綱伝承　鎌倉街道にまつわる伝承に「秀綱さま」に関わるものがある。私は大野川の子どもたちからこの人物の名前を聞き、また秀綱さまを祀る祠も教えてもらったと記憶するが、しかしこの誰もが知る「秀綱」なる人物の実体を当初は全く知ることができなかった。

それがわかったのは飛騨側の歴史を読んだ時で、天正十三年(一五八五)、金森長近に追われた松倉城・高堂城主三木秀綱がこの道を落ちのびる途中殺された事件を知り、秀綱さまとは三木秀綱のことと了解した。

この事件については実は『吉蘇志略』『信府統記』など信濃側の史料にも詳しかったのだが、秀綱夫妻は夫人の実家、南安曇の波田・淡路城をたより、飛騨高原郷より中尾峠を経て坂巻に下り、それより夫人は島々谷を下り、その途中殺され、秀綱の方は大野川を経、角が平に下ったところで土民に殺されたという。既に高原郷の今見村で別れて中尾峠・安房峠と別々の峠を通ったとする説もある。秀綱をかくまった大野川では、その後養蚕が盛んになった。大野川(元大野川)にも、殺された角が平にも蚕霊神社として「秀綱様」が祀られるようになった。怨霊信仰であろう。

以上の伝承から、飛騨高原郷と松本平・安曇野を結ぶ道には二本あって、一本が安房峠から大野川、一本が中尾峠から上高地、徳本峠から島々谷を下る道であったことがわかる。このうち中尾峠の道は、近世になって加賀前田藩が、最短で行ける参勤交代道を整備しようとして、上高地に陣屋を建てたという記録がある〈加州新道目論見一件〈『南安曇郡誌』二―(下)三八六頁〉〉。また安房峠は現在新トンネルを掘進中であるが、これが完成すれば、信州・関東と、北陸西部を結ぶ最短路になるといわれている。

越中にのびる鎌倉街道　安房峠・中尾峠より飛騨に入る道は、先に見た今見、即ち秀綱夫妻が別れたともいうその村で合流する。高原川に沿いつつ、道は西に進むが、高原郷の中心には入らず、山吹峠を越えて和佐府に入り、それより飛越国境・唐尾峠を越える。今はダムに水没した有峰を経て、やがて常願寺川より越中平野に出る。

この道もまた鎌倉街道と呼ばれていたことは岐阜県教育委員会『歴史の道・飛騨野麦越中街道調査報告書』(一九八〇年)に報告があるし、筆者も「史跡の見方・調べ方――地名・城館・荘園」(『文化財保護の実務』一九七九年)で言及したことがある。

この古道に沿っては、高原郷を支配した江馬一族の城館が多い。また永禄七年(一五六四)武田信玄の飛騨侵攻の道でもある。信玄に属した江馬氏最後の当主輝盛は、この道が常願寺川河畔に出るところ、越中への喉頸ともいうべきその地に中地山城を構えている。

もう一つの鎌倉街道・稲核栃沢道(仮称)　さて再び大野川に戻ろう。この一帯の地域の歴史を叙述した秀れた地誌が『南安曇郡誌』(一九六八年刊)である。この本によれば叙上の鎌倉街道・大野川道のほかに、実はもう一つの別の鎌倉街道があった。

大野川よりはるか下流の梓川の左岸、稲核(いねこき)の水殿(みどの)沢のもう一つ下流に栃沢という支流がある。そしてこの沢の奥にかくれ小屋、および殿様小屋と呼ばれる地名がある。その場所からは中世のやじりも出土しており、中世の遺跡といえるが、そこを登りつめると北面は小嵩沢山の尾根となっており、その道を「鎌倉街道」と称し、徳本峠から上高地に続いていたという。中尾峠―徳本峠―島々谷道の枝道が鎌倉街道だったことになる。

第三の鎌倉街道・番所越(高山越)　以上に述べた道は乗鞍岳北方の二つの峠を通る道であるが、乗鞍岳南方の峠が『あゝ野麦峠』で名高い野麦峠である。但し実は野麦峠の北方にも、もう一つ峠があって大野川と野麦(飛騨側)を結んでいた。近年の国土地理院の地図(二万五千分の一図・「野麦」昭和五十二年版)には記載が消えたが、手持ちの旧版の五万分

の一図(昭和四十一年・乗鞍岳)に「番所越」とある峠がそれで、大野川では「高山越」と呼んでいた(峠の麓を高山といった。今の一ノ瀬牧場周辺)。

この道を飛騨側の野麦・阿多野では「鎌倉街道」と呼んでいた。このことは前掲岐阜県教育委員会『歴史の道・飛騨野麦越中街道調査報告書』にも詳しいが、ここでは安曇村の研究者横山篤美氏の文化六年(一八〇九)の中沢家文書に関する報告を引用したい(福島立吉口述・長沢武編『北アルプス乗鞍物語』〈一九八六〉より)。

それは上高地を含めた近世松本領上野組二十六か村の大庄屋中沢家に残るものであるが、その内容を要約すると、飛騨の国益田郡阿多野郷十二か村と秋神七か村が飯米不足から松本米を買入れたいが、その道筋に当たる奈川の村々がなぜか故障して入れることができない。そこで昔からいい伝えのある鎌倉道、すなわち野麦峠頂上から奈川村へ下らずに乗鞍岳麓伝いに番所へ出て大野川に至り、神祠峠道に向かわずにそのまま梓川畔に出て、そこで架橋で梓川左岸に移り通称中山と呼ぶ斜面について下り、稲核の対岸で再び右岸に戻る鎌倉古道を再び切り開きたい。阿多野の伝承によっても、この古文書によっても、大野川のいう鎌倉街道とは別の道、即ちその道とは十字にクロスする番所越が、飛騨側でいう鎌倉街道であったことが明らかになった。

今でこそ地図にもない道になってしまったが、この道は大野川にとっても野麦にとっても重要な道で、近年まで双方によって切り開きが行なわれていた。この道に沿って番所側にはヒチババヤスンバ、サクラヤスンバ、カラマツヤスンバなど多くの休み場地名が残っていることは、往来が頻繁であったことをしのばせる。

誇りある古道　このように乗鞍岳周辺には鎌倉街道と呼ばれる古道が、少なくとも三本は検出できた。鎌倉街道という言葉の響きに、私は次のような印象をもつ。

第一に、鎌倉街道を伝承する村々は、かつては定畑や焼畑によるそば作り、養蚕、炭焼などを主たる生業としてきた山間の小村だった。そうした村々を、その昔に首都鎌倉に通ずる一級国道が通っていた。この村が日本の中心につなが

っていたのである。村人たちはそのことを強く誇り、語り継いだものであろう。

今一つの印象は忘れられた古道というイメージである。栃沢道も番所越(高山越)も近世の幹線とはいえない。前者には島々谷を行く徳本峠道が、後者には野麦峠道が、それぞれ本街道としてあったからである。特に野麦峠道は天正年間金森法印(長近)の道普請によって開通したことが『国中案内』にみえており、近世初頭の新道であることが明らかだ。新道の隆盛によって脇街道となった道は、まぎれもなく古道で、しかも中世の幹線路であった。古き道として意識されていたが故に、鎌倉街道としての呼称が残ったものであろう。また現実的な面においては、公儀による復旧・援助を強く主張し、アピールするために、この古い呼称が政治的に利用されることがあったことも留意しておこう。

これらは鎌倉街道という呼称が、増幅される傾向にあったことも示していよう。

二　北濃・郡上郡母袋の鎌倉街道

母袋　東京でくらしていた頃、ある日私は「いぶり豆腐」という一風変わった豆腐を食べたが、その説明書には、鎌倉街道を通る旅人が道すがら食した旨が記されていた。産地は岐阜県郡上郡大和村母袋。大和村は古今伝授で名高い東氏の館跡庭園の所在地である。私の心は彼の地に飛んだ。しかし実際に現地に行けたのは一年以上もたったのちであった。

異なる径路　母袋(上栗巣)は長良川の本流から別れ、東氏館・明建(妙見)神社のある谷を栗須川に沿ってさらに一〇キロも遡った源流、谷のどんづまりにある村であった。近年までナギ畑(焼畑)もさかんであった山村である。その村には確かに鎌倉街道の伝承があった。但し語る人によって、その径路については多少の差があった。

まず西宝寺方丈・野田光誠氏(大正二年生まれ)の話を聞いてみよう。

「……昔から裏道、裏道っていってね、鎌倉街道といったんですわな。白鳥、大間見から母袋、そして東俣(古道)の村有林、郡有林を通って古道の照願寺という寺へ出る。古道の村の上の方、古道峠を通る。東俣峠とは別。明方にもいけ

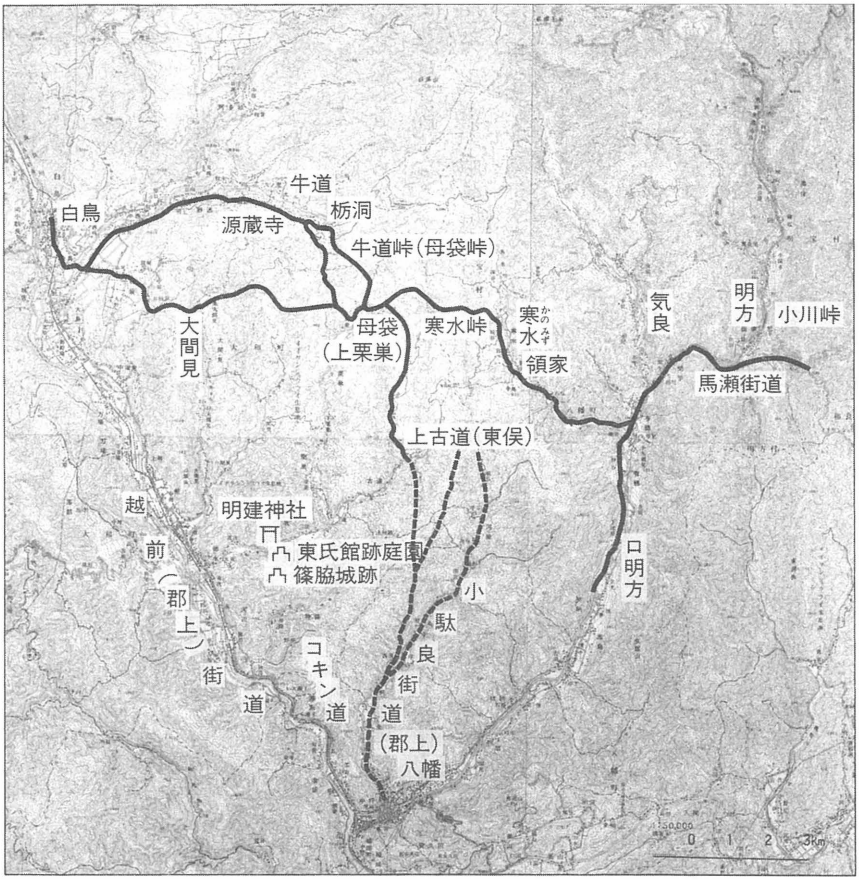
るけど、そっから先どっちかは知らん。本道(長良川本流沿いの越前街道、上保街道ともいう)は手形がいるから、抜け道で山どおしを行く。昔は道型がありましたよ。石畳？そんな、無いない。母袋の白山神社の裏に平家の墓ってある。裏街道を逃げて来たものだろう。木地屋の墓もある。木地屋も鎌倉街道を伝わってくる。どこで木を切っても良い。白鳥からは石徹白。それから越前の吉崎に蓮如様の寺がある。そこまでずっと鎌倉街道が行っているって聞いている。」

真宗大谷派の住持らしい発言である。次に筧政之助氏(昭和十四年生まれ)の話を聞こう。実はこの人こそがいぶり豆腐の経営者であった。

「スキー場を作る時、道しるべの石があって右東俣街道とか左かのみず(寒水)とか書いてあった。左のかのみず峠(明方村寒水に到る道)に行く方を鎌倉街道といったと思う。どういうわけでいったか知らないが、子どもの時から家の前の道を鎌倉街道、鎌倉街道といったですよ。家の前を通っていることは確実だが、上の方ではどの道を言うのかはっきりしらない。この道は北は二本杉、牛道峠(牛道では母袋峠と呼ぶ)を越えて牛道の栃洞・源蔵寺に出る。昔母袋にあった道しるべの石はわるさ(不幸)があったので牛道の方にもっていってある。この村は昔から下(下栗巣)より牛道との婚姻が多い。古道・寒水とも多い。両方の村から人足で出て道普請もする。一時間で牛道も寒水も行きますよ。」

母袋を起点として、大間見、牛道(牛道峠)、古道(東俣ともいう、古道峠)、寒水(寒水峠)へと四方に道が伸びていた。どうやらそのいずれもが、人によっては鎌倉街道と認識されていたようである。

御坂峠へ　この道が越前と関東を結ぶ道であったことはまちがいないだろう。母袋より東方の径路はどのように想定できるのだろうか。考えられる道は奥明方から馬瀬街道に入り、小川峠、楢尾峠、柿坂峠を経て下呂に到り、それよりさらに加子母、付知を経て中津川に出る径路である。このうち下呂・中津川間は飛騨街道ないし江戸街道また本街道と呼ばれた道で、歴史の道調査では『南北街道』として報告されている。そこでは御厩野に文覚建立と伝える大威徳寺跡が残ることを指摘し、鎌倉への道としての役割を担ったとする。また中津川よりは古東山道を踏襲した周知の御坂峠越で、



地図２　郡上郡母袋の鎌倉街道

『木曽路名所図会』に「鎌倉街道、今落合を経て、霧原山より御坂小屋に越をいふ」とある道である。

即ち研究史[2]に明らかだが、恵那山の肩を越え、伊那谷を北上し、高遠を経て諏訪より甲斐、御坂峠、足柄峠を経て鎌倉に到るのである。このルートは今日の中央高速道と重なる部分が多い。

古今道　一方、母袋より南方、古道に出る道はどこへ行くのであろう。それより東氏館のある、牧、篠脇(明建)に出、それよりコキン道(古今道か)と呼ばれる道を郡上八幡に到ったものであろう。八幡には名水宗祇清水がある。『常縁集』には

山田庄栗栖の社にて
花さかり所も神のみやまかな　常縁
さくらに匂ふみねの榊葉　宗祇

とある。栗栖(栗巣)―牧―八幡を結ぶこの道は、かつて宗祇が、古今伝授を受けた師東常縁とともに歩んだ道なのであろう。中世の主要道であり、のち近世越前街道の脇道に転じたものか。また歴史の道調査報告書『郡上街道』によれば、八幡城下から寒水への小駄良街道があり、枝道も多かったという。古い五万分の一図にみえる上古道から南へ峠越する道は直接八幡に行く道であろう。またこの報告書は、越前街道(郡上街道)は中世の白山長滝寺参詣路であり、芥見(岐阜市)において中津川から西下してくる鎌倉街道と合流するとする。京への道といえよう。

しかしながら、母袋からみて鎌倉に急行する場合は、寒水(かのみず)峠を選んだ方が適切だった。

私は今後、なるべく早い機会に牛道、大間見、寒水、古道を訪ね、鎌倉街道伝承の有無を確認するとともに、さらに明方―下呂―中津川の沿線の各村に、鎌倉街道伝承が残されているのかどうか調査してみたいと考えている[3]。なお母袋(栗巣)そして隣接する寒水にもそれぞれ「領家」という字名が残されている。山田庄領家方、気良庄(摂関家領)領家方に相当しようか。

II　都道府県による歴史の道調査

私は昭和五十三年から文化庁記念物課に勤務することとなったが、ちょうどこの年に国庫(文化庁)補助による歴史の道の調査・整備事業が始まった。現在までの十六年間に都道府県による膨大な量の調査報告書が刊行されている(別表参照)。

歴史の道調査実施状況（平成６年まで）

	調　査　対　象　街　道
青　森	羽州街道、松前街道(奥州街道２)、乳井(高田)通り、大豆板通り、百沢街道、西浜街道(鰺ケ沢街道)、十三街道、下之切通り(小泊道)、黒石・山形街道、奥州街道(1)、鹿角街道、上り街道(八戸街道)、久慈街道、田名部道、北通道、北浜街道、西通道
岩　手	奥州道中、奥の細道、気仙沼街道、今泉街道、院内街道、仙北道、平和街道、秋田街道、浄法寺・八戸街道、小本街道、宮古街道、大槌・釜石街道、盛街道、浮街道、久慈・野田街道、沢内街道
宮　城	奥州街道、笹谷街道、一関街道、松山街道、水戸街道、七ヶ宿街道、笹谷街道、出羽街道(中山越)、金花山道、二口越最上街道、関山越最上街道、江戸浜街道、気仙道、最上街道(田代西崎越・軽井沢越)、上仙北通、仙北道佐沼・登米道、涌谷・登米通、角田道・相馬道、白石・角田道
秋　田	北国街道(酒田街道)、男鹿街道(湯西街道)、大間越街道、北部・南部羽州街道、五城目街道、阿仁街道、鹿角街道、来満街道、濁川街道、生保内街道、角館街道、刈和野街道、平和(小松川)街道、大覚野(阿仁)街道、亀田街道、矢島街道、川大内街道、本荘街道、男鹿街道、手倉街道、須川街道、沼館街道
山　形	奥の細道、羽州街道、笹谷街道、最上川、出羽三山参詣道、六十里越街道、浜街道、小国街道、越後街道、米沢・板谷街道、二井宿・大塚街道、会津街道、最上小国街道、仙台街道(軽井沢・寒風沢越)、青沢越え、村山西部街道、関山街道、二口街道、狐越え街道、小滝街道、茂庭街道
福　島	奥州道中、羽州街道、米沢街道、相馬街道、二本松街道、白河街道、越後街道、下野街道(南山通り)、水戸街道、浜街道、岩城街道、御斎所街道、沼田街道(八十里越・六十里越・銀山街道)
群　馬	足尾銅山街道、日光例幣使街道、三国街道、信州街道、沼田・会津道、下仁田街道、清水峠越往還、古戸・桐生道、佐渡奉行街道、古河往還、利根川、中山道、十石街道、鎌倉街道、東山道、日光脇往還、吾妻諸街道
埼　玉	鎌倉街道上道、日光御成道、日光道中、日光脇往還、中山道、秩父往還、甲州裏街道、川越街道、秩父巡礼道、信州・上州道(土坂峠越・志賀坂峠越・十文字峠越)、児玉往還、荒川水運、新河岸川水運、入間川水運、利根川水運、元荒川水運、綾瀬川水運
東　京	五日市街道、中山道
千　葉	成田街道、佐倉道、水戸道中、鮮魚(なま)街道、日光東往還、木下街道、江戸川、利根川、御成街道、房総東往還、土気街道、伊南房州往還、大多喜道、久留里道、房総往還、安房街道、保田鴨川道、諸河川、海運
新　潟	北国街道、加賀街道、松本街道(千国街道)、富倉街道、松之山街道、魚沼街道、北国脇街道、三国街道、沼田街道、六十里越、八十里越
富　山	飛騨街道、北陸街道、立川街道、氷見能登道、飛騨街道(五箇山道・飛州小白川道)

	調　査　対　象　街　道
石　川	北国街道、北国脇街道、能登街道(七尾街道)
山　梨	秩父往還、穂坂道、中道往還、甲州街道、佐久往還、鎌倉街道(御坂道)、河内路(繁信往還)、西部路、若彦道、青梅街道、棒道、御岳路、谷村道、高尾道、戸田街道、逸見路、東河内路、市川往還、御幸道、鎌倉道、富士川
長　野	中山道、甲州道中、北国街道、大笹街道、佐久甲州街道、伊那街道、千国街道、善光寺街道、飯山街道、野麦街道、権兵衛街道、木曽街道、秋葉街道、裾花川通り大町通、土尻川通り大町通、戸隠道、保福寺通、富岡道、武州道、大門道、遠州街道、大平街道、岡谷道、三原道、草津道、富倉道、上州道、保科道、毛無道、犀川、千曲川、天竜川、木曽川、余地峠道、日影新道、谷街道、極楽峠道、有賀道、初期中山道、御嶽道
岐　阜	中山道、飛騨野麦街道、飛騨越中街道、北国街道、九里半街道、美濃路、伊勢西街道、伊勢東街道、郡上街道、高賀往還、谷汲巡礼道、中馬街道、下街道、岩村街道、南北街道、飛騨街道、飛騨西街道、白川街道、高山街道、天生街道・小鳥道、越中西街道、平湯街道、飛騨北街道、馬瀬街道
静　岡	東海道、姫街道、身延街道、秋葉道、下田街道
愛　知	東海道、本坂道、岐阜街道・美濃道、佐屋路、木曽街道、下街道、常滑街道、師崎街道、飯田街道、足助街道、平坂道、伊那街道、別所街道、田原街道
三　重	熊野街道、和歌山街道、伊勢本街道、初瀬街道、伊賀街道、大和街道、巡見街道、伊勢別街道、鈴鹿の峠道、菰野街道、八風街道、濃州街道、美濃街道、東海道、伊勢街道、(朝熊岳道・二見道・磯部道・青峯道・鳥羽道)
滋　賀	朝鮮人街道
大　阪	熊野街道(小栗街道)、紀州街道、父鬼街道、粉河街道、大木嶺、槇尾嶺、井関越、根来街道、箱作越、東畑越、西畑越、東高野街道、西高野街道、竹の内街道、下高野街道、中高野街道、天野嶺、千早街道、富田林街道、水越嶺、平石嶺、釜室越、京街道、奈良街道(暗嶺)、奈良街道(亀瀬越)、古堤街道、河内街道、磐船街道、清滝街道、荒坂嶺、尊延寺越、傍示越、生駒越、中垣内越、十三嶺、信貴越
兵　庫	西国三十三ヶ所巡礼道、山陽道、山陰道、美作街道、因幡街道、市川舟運
奈　良	初瀬街道、竹内街道(二上山麓の道)、伊勢本街道
和歌山	熊野街道、高野山参詣道、南海道、大和街道、淡島街道、上方街道、修験の道、高野・竜神街道、竜神往来、大峯熊野修験道、諸河川、海運
鳥　取	智頭街道、津山往来、備中往来、日野往来、若桜往来、八橋往来、境往来、法勝寺往来、雨滝往来、倉吉往来、新出雲街道、但馬往来、鹿野往来、伯耆街道、大山道、出雲街道
岡　山	山陽道、玉島往来、倉安川、津山往来、出雲街道、因幡街道、金比羅往来、鴨方往来、高瀬通し
山　口	萩往還、山陽道、赤間関街道(中道筋・北道筋・北浦道筋)

	調　査　対　象　街　道
香　川	遍路道、金比羅参詣道、多度津街道、丸亀街道、伊予街道、仏生山街道、長尾街道、志度街道(下往還)、伊予道、阿波道、讃岐国往還(南海道)、多度津道、丸亀道、宇多津道、鵜ノ田尾越、万駄越、海運
熊　本	豊後街道、豊前街道、日向街道、薩摩街道、人吉街道、天草路、菊池川、球磨川、庵室路、肥後峠越、緑川
大　分	肥後街道、伊予街道、日向街道(豊前道)、勅使街道、放生会道、行幸会道、峯入り道、奈多行幸会道、永山布政所路、岡城路、臼杵城路
宮　崎	都豊往還、高城往還、都於郡往還、豊後街道、高千穂往還、(田代及び水清谷、渡川経由) 椎葉山往還、椎葉山往還、米良街道、飫肥街道、鵜戸街道、志布志街道、肥後街道、薩摩街道、諸塚間道
鹿児島	出水筋、大口筋、日向筋、加久藤筋
沖　縄	末吉宮参詣街道、真珠道、国頭・中頭方西海道、弁ヶ嶽参詣道、島尻方街道、東海道、国頭地区東海道、八重山諸島の道、宮古諸島の道、久米島及び周辺諸島の道

この調査は道路遺構の残りの状況を重視して、近世の道が調査対象となることが多かった。その中で鎌倉街道そのものを調査対象としたものは埼玉県(鎌倉街道上道)、山梨県(鎌倉街道―御坂路、及び鎌倉道)、群馬県(鎌倉街道)がある。また調査報告書のタイトルには鎌倉街道とはないが、報告書の中で鎌倉街道伝承に言及するものは、前掲の岐阜県教育委員会『歴史の道・飛騨越中野麦街道調査報告書』、長野県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅸ野麦道』、同『Ⅻ木曽街道(飛騨街道)』、千葉県教育委員会『伊南房州道往還Ⅰ』など多い。

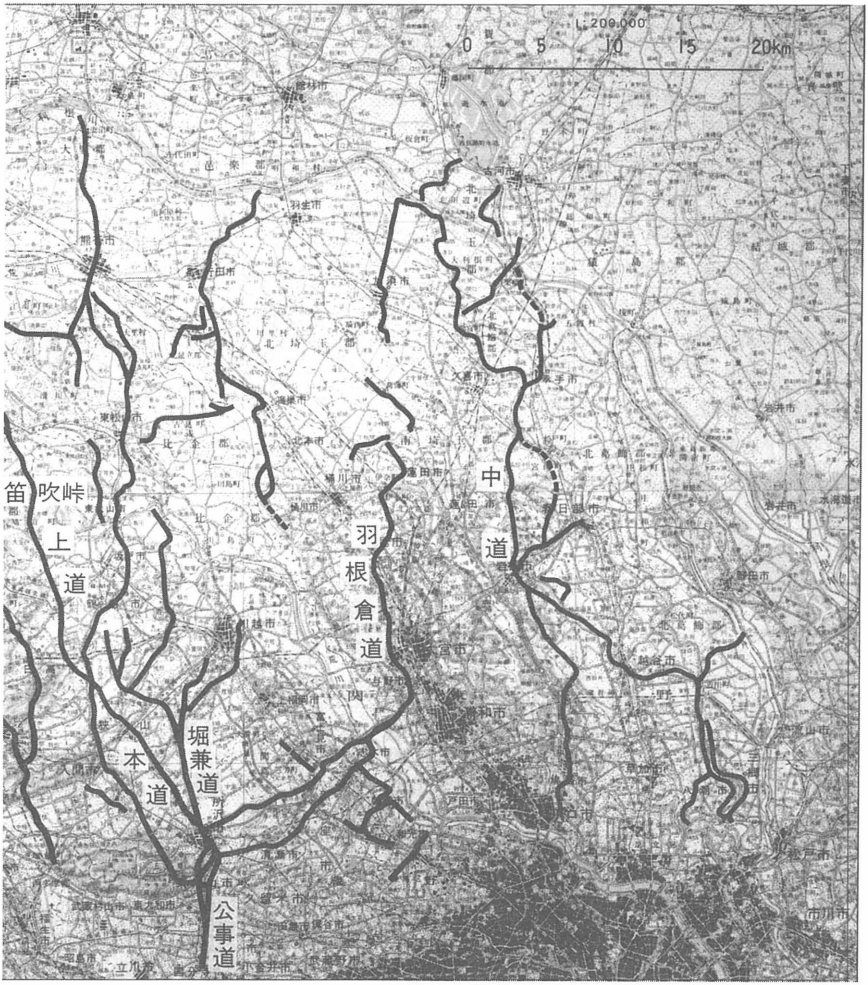
また静岡県教育委員会および愛知県教育委員会による「東海道」は、それぞれ近世東海道に先行する中世東海道たる鎌倉街道について記述している。

但し先程より述べてきたように、鎌倉街道には忘れられた古道、あるいは主要道の陰となった間道、という側面がある。それ故にか、先述した乗鞍山麓の三本のうち二本、また母袋の鎌倉街道については調査はされていない。

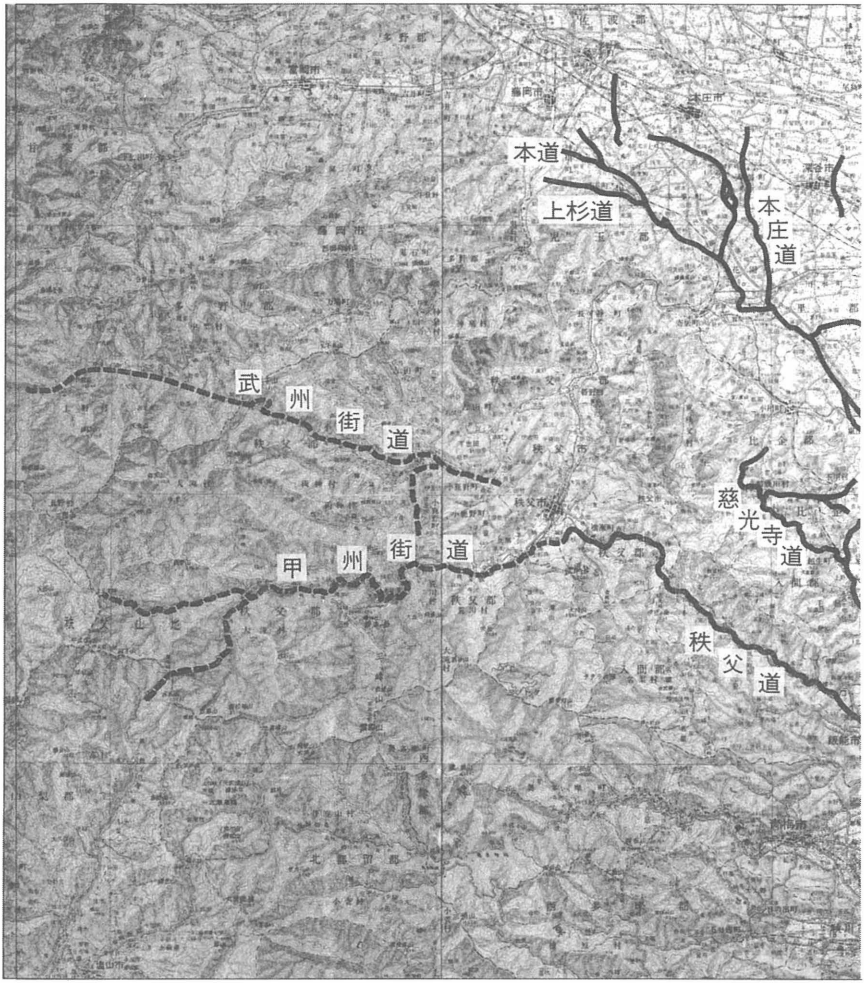
さて以下では、極めて印象的になるが、各県の報告の概要を紹介しておこう。

(一)埼玉県

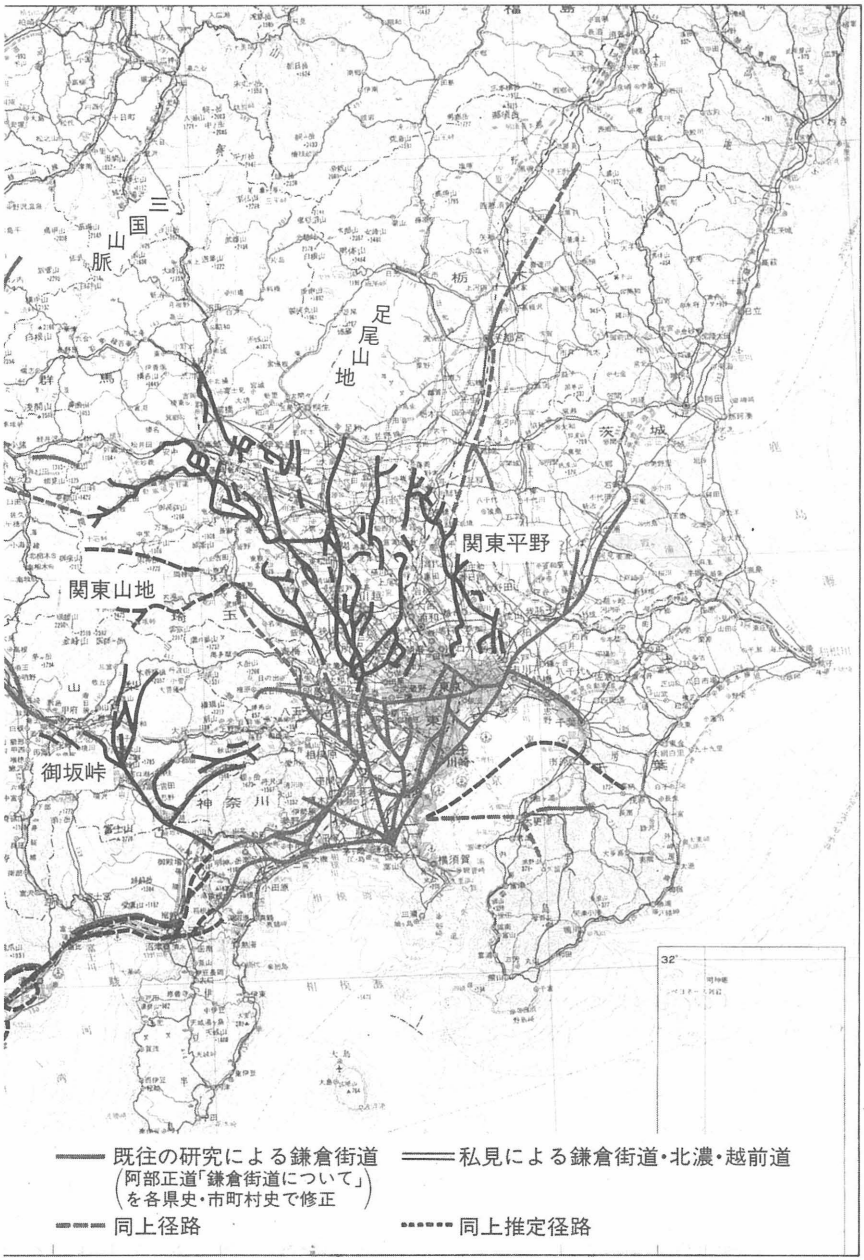
網の目状の道　埼玉県では本調査に先立って、予備調査が行なわれ

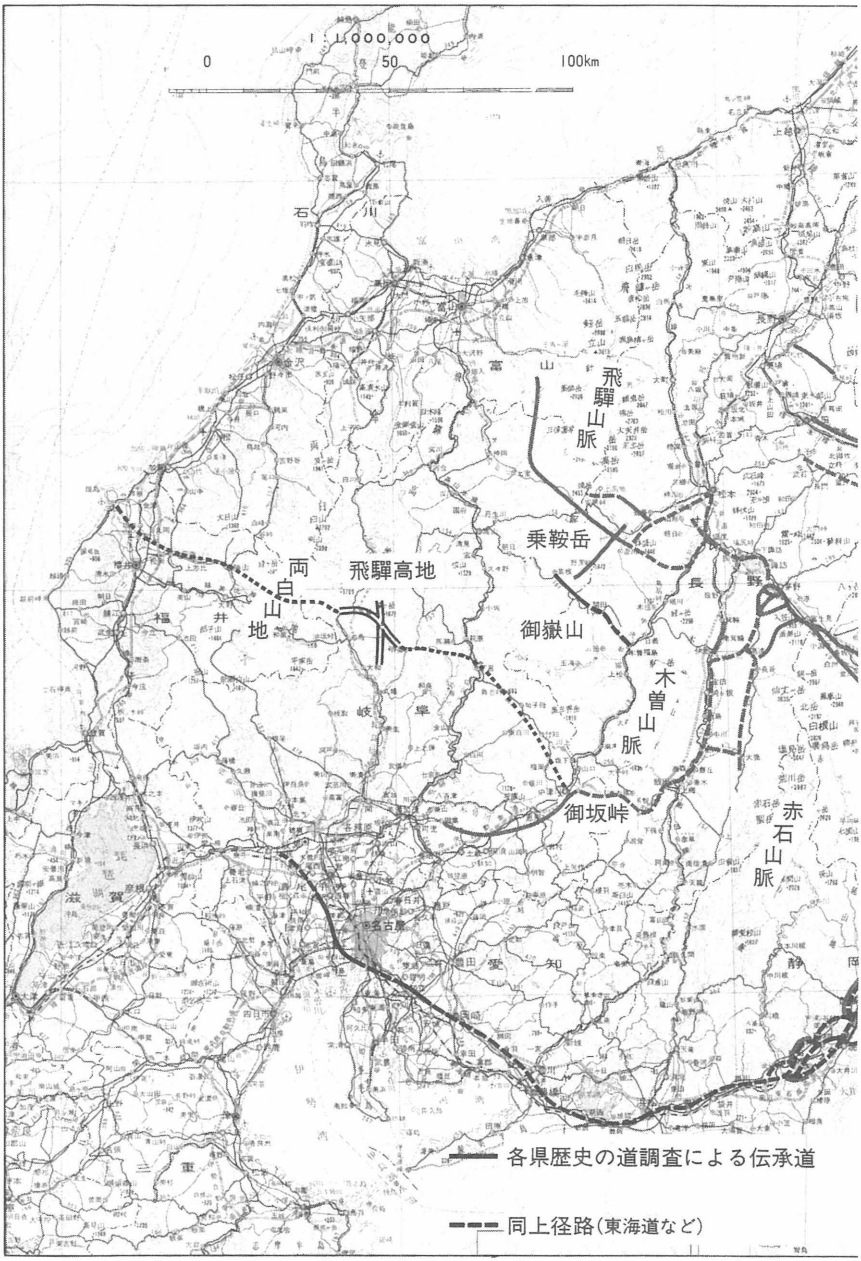


道〈志賀坂峠、十石峠越〉を含む）　埼玉県教育委員会・埼玉県立歴史資料館『埼玉県歴史育委員会『歴史の道調査報告書第一集・鎌倉街道上道』昭和58年３月の記述を加筆。



地図３　埼玉県内の鎌倉街道伝承地分布図（一部甲州街道〈十文字峠・雁坂峠越〉、武州街の道調査報告書・県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』昭和57年３月付図に埼玉県教


三国山脈
足尾山地
関東平野
関東山地
御坂峠
神奈川
既往の研究による鎌倉街道
(阿部正道「鎌倉街道について」を各県史・市町村史で修正)
私見による鎌倉街道・北濃・越前道
同上径路
同上推定径路



地図４　鎌倉街道（伝承道）の分布

ている。その結果は『埼玉県歴史の道調査報告書・県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』（昭和五十七年）として刊行されたが、その成果としての地図を見た時は全く瞠目する思いだった。なぜかというと、そこに記された鎌倉街道は網の目になっていたからである。大げさにいえば毛細管のようだった。併行するもの、直交するもの、まるで円孤を画くもの等々。鎌倉街道といえば国道一号線のように一本の道にちがいない。そういった私の先入主を、この鎌倉街道伝承古道分布図は、みごとに払拭してくれた。

このことの背景には、幹線たる鎌倉街道につながる支線も全て鎌倉街道と呼ばれたこと、また、ある時期鎌倉街道の代替道路が用意されると、併行する二本の道路もともに鎌倉街道と呼ばれたこと等の様々なケースが想定される。

八十里越の場合　似たようなことがある。越後と会津を結ぶ古道に六十里越と八十里越という二つの道がある。新潟県入広瀬村の場合、大白川（おしらかわ）などの中心集落を通過するのは六十里越で、八十里越は村の北方、わずかに村境をかすめて通過するのみである。しかし、通過道路である八十里越も大白川の人々の生活に無関係だったわけではなく、八十里越を経て村に帰ってくる人もいたし、峠の茶店などは大白川の人が経営していた。ために大白川の人はその八十里越の道に到る約十キロ、二里半の道を八十里と呼んでいた。大白川における「八十里」とは、決して会津と、越後長岡を結ぶ道ではなかったのである。

同様に鎌倉街道につながって行く道が、みな鎌倉街道と呼ばれたことも大いにありそうである。ここでも鎌倉街道は増幅される傾向にあったのだ。但し大白川の「八十里」が山村大白川の生活の理解に不可欠であったように、各村における幹線鎌倉街道に到る脇道鎌倉街道も、各村の生活と歴史を考える上で不可欠といえよう。

このように増幅され錯綜した鎌倉街道網にも、報告書は以下の濃密たる幹線道路を見出している。

(1)中道、(2)羽根倉道、(3)上（かみ）道（つ）（みち）、(4)秩父道、(5)慈光寺道、がそれである。

(二)群馬県

ここでも伝承古道は、時に螺旋状に、時に稲妻状に、と複雑に分布する。しかし幹線と推定できるのは、いずれも上道(埼玉県(3)の本線と支線である。

上道　上道本道は(1)信濃路と(2)越後路があり、(1)にはさらに下仁田・南牧から佐久方面への道(1)—A)と、碓氷峠につながると思われる道(1)—B)がある。但し伝承地は(1)—Aは南牧村まで伸びており、かなり距離が長いが、(1)—Bは峠よりは遥かに手前、高崎郊外の板鼻あたりでとまっている。(2)も同様渋川どまりで、越後境のどの峠まで行くのかも定かではない。

上道支線　上道支線には(3)新田庄に通ずるもの、(4)邑楽郡・足利庄に通ずるもの、(5)館林に通ずるもの、(6)下野国府(栃木市)方面に通ずるもの、等がある。

(三)山梨県

御坂道　山梨県での鎌倉街道は、まず第一に古東山道の継承である御坂路である。この道にも、鎌倉街道に併行し、時には直交する古道(古い御坂路)がある。埼玉県ほどではないが、複雑な鎌倉街道の一側面がのぞいている。

支線鎌倉道　さらにこの幹線鎌倉街道に到る支線鎌倉道の場合には、毛細管状現象が著しい。今それらの道を整理してみると、幹線である石和道(鎌倉街道・御坂道)の南方に二本併行する形での分布がみられ、また御坂峠を下った道が甲府盆地に入ってゆく黒駒近辺から北方には塩山や一ノ宮(国府・国分寺)方向に、主として三本の支線が、からみあいながら北上している。また近世の甲州街道の南方に、上野原・秋山・道志のあたりに併行する四本の鎌倉道が走る。いずれも西に行った富士吉田、あるいは山中湖のあたりで鎌倉街道・御坂越に合流する。しかし道志周辺の場合では、道志川、即ち相模川の源流について下り、東に関東平野に出た方が、よほど早く鎌倉に到着できたことであろう。

(四)静岡県

東海道　以上みてきた三県は伝承に重きをなした調査を行なっている。しかし鎌倉街道の最重要路であった東海道が通

過する各県の調査は、それらとはやや趣きを異にする。

静岡県の場合、中世東海道筋の比定にかなりのスペースが割かれている。ただその手法は中世の記録・紀行文からの復原である。今までにみてきた地方とは異なり、中世東海道には同時代の文献が圧倒的に多い。

豊富な紀行文　まず鎌倉時代のものを挙げれば『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』『吾妻鏡』『関東往還記』『信生法師集』『みやこぢのわかれ』『春の深山路』『もがみの河池』『無名の記』『六代勝事記』『うたたねの記』『問わず語り』があり、南北朝期以降はさらにその数を増し、『大乗院記録』や『実暁記』のような京・鎌倉百二十余里、六十三宿を列挙した記録さえ残っている(『古事類苑』地部)。したがってこの県の報告書の記述には、他県にはない鎌倉幕府や室町幕府の交通政策、駅伝制度、宿・伝馬制の成立・変遷についての詳細な分析がなされ、東海道ならではの叙述の感がある。

鎌倉街道伝承地　しかしこの膨大な報告書には、鎌倉街道のことばは出てこない。たしか山梨県の報告書には鎌倉街道の伝承は駿河・伊豆にも分布する、とあったが、それにもかかわらずである。

この報告書で道の異称として紹介されるものには「道灌道」がある。豪族滝道灌から来たものという。

中世の愛鷹山麓に根方街道が通り、併行して浮島ヶ原を距てた南方、海岸砂丘上を古東海道が通る。報告書でもその二本のルートが図示されている。この二本の道をつなぐ道が興国寺城下の竹田道(武田軍道か)で、小字名にも残る。

実は前者の道灌道が牧ノ原台地に上ったところでは鎌倉街道と呼ばれていた(『金谷町史・地誌編』平成四年)。また後者の根方街道も鎌倉街道と呼ばれていた。『角川地名大辞典・静岡県』によれば、ほか足柄峠越・乙女峠越、清水・駿府間の北街道が、また原秀三郎氏御教示によれば島田市智満寺を通過する道も、鎌倉街道と呼ばれていたという。本街道そのものの場合もあれば、脇街道の場合もあったということになろう。

(五)愛知県

伝承地　尾張・三河には鎌倉街道伝承地はかなりある。但しそれらは既に近世の地誌『尾張徇行記』(一七九二～一八二

二)、『尾張名所図会』(一八四四)等によって広く知られたものが多い。場所が限定されているのも一つの特色で、今日では鎌倉街道跡の碑や説明板が立てられたり、市町村の史跡に指定されたところも多い(折戸〈下津〉宿、萱津東宿、二村山、刈谷祖母神社、安城熊野権現社など)。よって埼玉・群馬・山梨県のような網の目状の分布は検出されていない。

小栗街道　尾張の場合に注目されるのは、鎌倉街道の呼称と小栗街道の呼称の混在である。小栗街道は一般には熊野古道の通称として知られているが、尾張にも登場しており、『尾張名所図会』の古渡に「小栗街道」とあるほか、『尾張徇行記』の稲葉地村、上中村、米野(こめの)村の項に記述があって、木曽川から尾張を南下し、萱津―東宿―上中村―露橋―古渡に続く古道であったことがわかる。今も名古屋市内に二カ所の小栗橋と、小栗通がある。他に一宮市内にも小栗橋がある。

(六)岐阜県

美濃路　歴史の道報告書『美濃路』の揖斐川、また旧長良川(境川、小熊川)の渡しの項に鎌倉街道の記述がみられるが、研究史からの引用らしい。現地では往還または墨俣街道と呼ぶようだ。なお旧東山道を継承する鎌倉街道(御坂峠越)については後述する。

(七)長野県

飛騨街道西野通り　『歴史の道調査報告書Ⅻ』は木曽福島と飛騨高山を結ぶ飛騨(木曽)街道、つまり西野通り高山道の報告書である。この道は木曽御嶽山の北麓、西野、日和田を通過するのであるが、西野あたりではこの道を鎌倉街道と呼んだという。この道に沿っては木曽氏の烽火台が点々と配されている。

信玄道　次に先の上野国鎌倉街道の続きが知りたくて、歴史の道報告書三十四『余地峠道』を読んでみた。鎌倉街道信濃路のうち南牧村に到っていた南側ルートの続きである。そこには鎌倉街道の伝承はなかったが、近世の余地峠道とはまた別に古道があり、その中世余地峠道が「信玄道」と呼ばれていた。

群馬県でも白井長尾氏の勢力が強かったことを反映して、鎌倉街道が白井道と呼ばれることもあったという(前掲報告

書・三頁)。同様にこの本来の鎌倉古道が信玄道と呼称されるようになったことが、考えられよう。

塩田平　以前に塩田城跡(上田市)を現地調査した折、前山寺と塩田城の間の道が鎌倉街道であると説明を受けた。のちに黒坂周平先生にその話をしたら「あれはまちがいだった」とのことだった。それより北方、下城戸を通るのが正しい鎌倉街道とのことである。

『上田小県誌』(一)(一九八〇)をみると、先述の前山寺前から砂原峠に通ずる道が直路(すぐじ)、即ち軍用道路で、一方、下城戸を通る道が本道だったとあり、「この鎌倉とを結ぶ道(現在鎌倉道と呼んでいる)」(九八九頁)というまぎらわしい記述があった。四三五頁の地図では下城戸通過分の道のみに「鎌倉街道」とある。研究者が推考した「鎌倉街道」と、実際に伝承されてきた「鎌倉街道」は峻別して記録に残すべきではなかろうか。この道についての歴史の道の報告はない。

(八)千葉県

港津からの鎌倉街道　千葉県内には木更津市烏田に「北かまくら道」とある道標が、また君津郡根形村野田および平岡村川原井に「鎌倉街道」の小字があり、古く小熊吉蔵氏の報告がある(『千葉県史蹟名勝天然紀念物調査報告』〈鎌倉街道〉、「西上総に於ける古街道と国府郡家所在地の関係」〈『史蹟名勝天然紀念物』七―四、一九三二〉)。

歴史の道調査報告書『伊南房州通往還Ⅰ』では、これらとはまた別に長生郡長柄町山根に残る鎌倉街道伝承古道が報告されている。内房の港津の一つ浜野(または八幡宿)につながる古道であろうと推定されている。上総の国府津(浜野)から国府、そして内陸にむかった道にちがいない。上総の三本の鎌倉街道はいずれも港津を起点とする古道であり、鎌倉の外港六浦につながるのである。

(九)福島県

あづま街道　「歴史の道」調査報告書『奥州道中』は『郡山市史』や文政期の「貞一聞書」によって鎌倉街道、古海道を推定している。近世奥州道中に併行する道のようである。また安達太良山、吾妻山の山麓から半田山を峰越する「あづ

ま街道」にも言及がある。私はこの道について秀衡街道、吉次街道という呼称を聞いた。

(十)岩手県

安倍街道　岩手県「歴史の道」調査報告『奥州道中』によると、北上川東岸に「あづま街道」、また稗貫郡や紫波郡に「鎌倉街道」や「安倍街道」と称される旧道があるが、部分的に存在し、つながらないとある。最北の鎌倉街道であろう。

※　以上主として都道府県教育委員会による歴史調査に言及した。ほかに近年の県史、市町村史の刊行によっても新知見が多く得られている。今その全てを紹介する紙幅の余裕はないが、とりあえず『長野県史』(通史編二)、『栃木県史』(通史編3)、『小山市史』(通史編Ⅰ)、『新編埼玉県史』(通史編二)、『富士見市史』(通史編上)を鎌倉街道必読文献として挙げておこう(これらの成果は地図4にとりいれた)。[4]

Ⅲ　伝承と文献史学

方法の差による結論の差　見てきたように、鎌倉街道の復原にあたっては、大きく二つの手法があった。鎌倉街道の伝承、また伝承・情報を収集する方法と、今一つは中世の紀行・記録から宿を比定し、それを結んで行く方法である。

前者の伝承・地名を重視する方法では、鎌倉街道は毛細管状に、網の目状に検出される。一方、文献に比重を置いた調査の場合は、鎌倉街道は原則単線としてのみ表現される。方法の差異による結論の差異が明瞭である。

先に恵那山の北、信濃・美濃境の御坂峠に言及したが、中津川より西方の径路については、『瑞浪市史』『恵那市史』にもふれられている。しかし記述の中心は、安永年間(一七七二〜一七八〇)の記述になる「美濃御坂越記」にみえる径路の現地比定で、実際それぞれの市域内に鎌倉街道伝承があったのかどうかについての言及がない。ただ『恵那市史』

地名編をみてみると、竹折の宿という所に「鎌倉街道」の地名があったことがわかる。実はこの竹折こそ「美濃御坂越記」に記された古道の宿場なのである。この竹折の、それも「宿」に鎌倉街道の地名があるということは、単に近世記録の補強にとどまらず、それを臨場感あふれるものにする。しかし「通史編」にはこのことへの言及が全くない。

一般に文献史家の記述になる調査報告では、伝承・地名の収集に割かれる労力は少ない。交通史研究の古典、例えば新城常三『鎌倉時代の交通』（一九六七）などを読んでも、その思いは強い。学界状況からすれば、文献によって確実な記述をするスタイルが主流で、正統なようにもみえるが、しかし近世以降の長い研究史を視野に入れれば、必ずしもそうとばかりはいえない。

江戸時代の鎌倉街道研究

例えば寛延四年（一七五一）、酒井忠昌が叙述した『南向茶話』（『日本随筆大成』三期所収）をみよう。

問曰、王子村の脇に谷村と申処ありて、畑道の間を鎌倉海道と申伝へ候、古へ当国の往来筋の由申候、如何承度候、

答曰、仰之通りに予も承候、此所谷村と呼申候に付、畑道も鎌倉海道と唱へ候哉と被存候所に、古老の説に（中略）、当国往古の道筋は、今の青山百人町の西北の方、原宿と申所をへて、千駄ヶ谷八幡の前（此地今に所の小名に鎌倉海道と呼ぶ）大窪へ過、高田馬場より雑司ケ谷法明寺脇通り、護国寺後通り、只今の中仙道の道を横ぎり、谷村瀧の川村を経て、豊島村より千住の方へ古の通筋也といへり、右物語を案ずるに、其間の道筋三ケ所迄旧名残り候得ば、其拠なきにあらず、只今青山百人町より直に相州小田原へ往来道を、俗に中通と呼び、東海道より二里近く、日本橋より相州小田原迄十八里の由也。（略）

今から二百五十年前、江戸近郊の王子や千駄ヶ谷に残っていた鎌倉街道の小名を手がかりに、近世の識者は鎌倉街道中道の復原を行なっていた。この手法こそ真に古典的でオーソドックスな方法であり、『新編武蔵国風土記稿』（一八二八）、『新編相模国風土記稿』（一八四一）の編纂を準備するものだった（ほかに大田南畝の鎌倉街道研究もある）。

伝承・地名による復原と、文献による復原では確かに一長一短があろう。伝承自体が増幅傾向にあるとすると、仮に派生した鎌倉街道枝道相互を連結してしまえば、奇妙な復原になることもあり得よう。しかし、この点はより徹底した収集により防ぐこともできよう。

文献史料の問題　一方の文献史料(記録・紀行)は一時的・一過性的であり、また一場的でもある。鎌倉街道の拡がり、派生の仕方、また変遷など、多面的で複雑なあり方は考えにくいのかも知れない。道は動く。筆者が文化庁に勤務していた十六年間に、新品同様に整備した歴史の道が、災害によって別位置に付け直さざるを得なくなるということが、再々あった。まさに道は生き物であって、動くのである。長い歴史の中ではさらに大きな動きがあったはずである。そうした動きは、文献によって解明できる場合も多少はあろうが、やはり現地の観察が有効である。

また文献史料は、東海道二つの御坂路(旧東山道)、善光寺参詣道など限られた街道にしか残っていない。貴重な記述であるが、それは鎌倉番役、関東御公事を勤めた武士や従者、年貢送進・夫役にあたった民・百姓らにとっての鎌倉街道の全てではなかった。偏在する文献史料の限界といえよう。

それにしても、文献史料の豊富な街道に限って、伝承や地名の調査がおろそかになりがちな傾向があったようにも思う。文献史学者は文献のみを重んじ、伝承・地名等の史料には関心が薄い。しかしそれでは、僻地・山村に細々と伝えられてきた、生きた鎌倉街道の再発見は困難なのではなかろうか。

伝承からの歴史叙述　伝承は時間を超越する。伝承を歴史史料とした場合、そのことは短所でもあるが、長所にもなるのだ。

全国には中世的な伝承をもつ街道が多く残る。奥州では秀衡街道、吉次街道。関東周辺では道灌道、信玄道。北陸では謙信道、木曽街道。近畿では小栗街道、北九州では太閤道。

秀衡・吉次とはむろん藤原秀衡、金売り吉次に因む。奥州平泉を目指す道で、近世の奥州道中が、盆地内の平地を行くのに較べ、山間を通ることが多い。間道でもある(福島県中通り地方、あづま街道ともいう)。木曽街道は木曽義仲に

因み、近世の北国街道（北陸道）より海側を行く。安宅関はこの木曽街道に配置されている（石川県小松市周辺）。小栗街道は架空の人物小栗判官に因む。熊野を目ざす道であり、大阪府や和歌山市周辺では熊野古道と同義語だが、田辺市から熊野にかけては、御幸道たる熊野道とは厳然と峻別されている。小栗判官はカッタイ（ライ患者）であり、小栗道はカッタイ道だというのである。差別された小栗道は、今一つの差別の問題にもつながる。小栗判官がとまったところが「夙」だという伝承がそれである。私たちはこうした伝承を手がかりに、単に古道の復原のみではなく、古道を歩んだ人々の心の復原、彼ら彼女ら、そしてその旅を救けた人々に対するいわれなき差別と葛藤の歴史をも復原することができるのである（服部「現地調査と荘園の復原」へ『講座日本荘園史』1　荘園入門、一九八九所収〉　二四七頁以下）。

今私は、主たる歴史史料をこうした古道に関わる伝承そのものに求めつつ、文献史料は補完的にのみ用いる方法によって、いつの日にか、道の中世史を叙述したいものと考えている。

注

（1）乗鞍での聞取調査は、斎藤辰恵氏（大正二年生まれ）、福島清毅氏（明治三十九年生まれ）の両氏からによる。

（2）鎌倉街道に関する研究は多いが、包括的な古典的研究として、阿部正道「鎌倉街道について――その分布と遺跡――」（『人文地理学の諸問題――小牧実繁先生古稀記念論文集』（昭和四十三年）をあげたい。

（3）岐阜県教育委員会『歴史の道調査報告書・馬瀬街道』（昭和五十九年）によると、この道沿いの弓掛に悪源太義平にかかわる地名伝説があり、またこの道より派生し、上呂方面に向かう道（近世馬瀬街道の本道）には蓮如石があるという。

（4）なお筆者は今春、異動により文化庁を去ったので、刊行された全ての歴史の道調査報告書を、手元に取り揃えて読むことができず、また関連する県史、市町村史にも十分目を通すことがかなわなかった。この点につき、読者・関係者の御海容を願いたい。

（はっとり・ひでお／九州大学助教授）